ひょうご詩画展 2004

今年から会員による詩と絵画、写真、書などのコラボレーションの展示を始めます。ご高覧ください。

朝比奈宣英	岩川　昌子	岩崎　風子	大石　玉子	大賀　二郎	大西　隆志
桂木　恵子	葛城　啓子	香山　雅代	児玉　勲顕	小西　民子	佐藤　勝太
直原　弘道	鈴木　賀恵	鈴木　濤	たかとう匡子	たかはらおさむ	田中　敏弘
玉井　洋子	中島　友子	中島まさの	仲　清人	中川　道子	中堂けいこ
中原絲佐子	西海ゆう子	忍海　貴子	春名　純子	福井　久子（田中美和）	
松尾　茂夫（森健）	松下　玲子	丸本　明子	水こし町子	森本　敏子	安水　稔和
山本　真弓	山本美代子	由良佐知子	和田　英子	渡辺　信雄	

【2月10日現在の出展予定者】（　）は共作者

兵庫・詩の現在展（詩誌と詩集の現況展示）

展示予定の詩誌（発行地）

Les Alizes	（尼崎）	ア・テンポ	（神戸）	幻想時計	（明石）
第三紀層	（西宮）	MeLange	（神戸）	ふらくたる	（三木）
Messier	（西宮）	輪	（神戸）	別線	（加古川）
槐	（西宮）	階段	（神戸）	文芸日女道	（姫路）
季	（西宮）	a wind egg	（神戸）	姫路文学	（姫路）
Contralto	（西宮）	プラタナス	（神戸）	播火	（姫路）
縞猫	（西宮）	貝の火	（神戸）	草	（夢前）
乾河	（芦屋）	海馬	（神戸）	湾	（相生）
風神	（芦屋）	多島海	（神戸）	青穂	（赤穂）
現代詩神戸	（神戸）	OTAKSA	（神戸）		
火曜日	（神戸）	詩と作文	（神戸）		

（同人の詩集もほぼ一年分を展示します。）

◇会場のご案内◇

竹中郁生誕百年記念展／併催 ひょうご詩画展2004 (H.16) 兵庫・詩の現在展

会　期　2004年3月16日（火）～3月21日（日）
（午前10時開館・午後5時閉館。但し初日は午後1時開館・最終日午後3時閉館）

会　場　県立美術館 原田の森ギャラリー東館
〒657-0837　神戸市灘区原田通3-8-30
☎078（801）1591
（最寄り駅：阪急・王子公園駅／王子動物園南側）

入場無料

主　催：兵庫県現代詩協会
後　援：兵庫県・兵庫県教育委員会・（財）兵庫県芸術文化協会
神戸市・神戸市教育委員会・神戸芸術文化会議

ごあいさつ

伊勢田史郎
（兵庫県現代詩協会会長）

かつて井上靖さんが〝天成の詩人〟とよんだ竹中郁さんは、明治三十七年（一九〇四）四月一日（戸籍は三月三〇日）、神戸市兵庫区永沢町四丁目七〇番地で生まれました。本年で満百年になります。

十九才の時、北原白秋・山田耕筰主宰の「詩と音楽」に、新進十一人集の一人として推薦されました。春山行夫などとともに白秋に認められたのですが、その詩作品は「幻の蜃気楼」「朝」など四編。以後七十七歳十一か月で長逝されるまでの、竹中さんの詩業の大きさはまことに稀有といえます。

杉山平一さんは「竹中郁の世界」で〝飾り気のない無垢〟そ、絶えず、竹中氏の心を掴るがせたもの〟と述べておられます。また、竹中さんは〝「動物磁気」と「ポルカ　マズルカ」の二冊があればそれでいい〟と、「竹中郁全詩集」出版を進めていた杉山さんや足立巻一さんに、それを拒否するような言葉をもらされたそうです。今回開催の「竹中郁生誕百年記念展」では、そのように、文学に対して、そして人生そのものにも、潔癖で厳しい姿勢を保ちつづけた〝生粋の詩人（井上靖）〟の横顔を知っていただけるでしょう。

併催するのは「兵庫・詩の現在展」と「ひょうご詩画展」。現在展は例年実施している詩誌・詩集の展示。詩画展は本年はじめての企画です。いずれも、会内外の方々の交流がいっそう深まることを願っての催しです。ふるってご参会ください。

竹中郁生誕百年記念展　2004.3.16～3.21

竹中郁略年譜

1904年（明治37） 4月1日（戸籍は3月30日）、兵庫区永沢町4丁目の澱粉製造業石阪芳松の5子として生まれ、生後すぐ母の妹くにの嫁ぎ先竹中亀太郎の養子となる。竹中家は兵庫の旧家で、北仲町で紡績用クレーの製造業を営み、裕福であった。

1917年（大正6） 13歳　兵庫県立第二神戸中学校（現兵庫高校）入学。小磯良平と同級になり、生涯にわたる親交を結ぶ。5年生の時、北原白秋、山田耕作主宰「詩と音楽」誌の新人11人集に推薦され、詩人を志す。

1923年（大正12） 19歳　関西学院文学部英文科入学。在学中、福原清と詩誌「羅針」を発刊。また、第一詩集『黄蜂と花粉』刊。昭和2年卒業。

1928年（昭和3） 24歳　小磯良平と渡欧。2年間をパリで下宿し、ヨーロッパ各地を旅行。昭和5年帰国。

1932年（昭和7） 28歳　第4詩集『象牙海岸』刊。詩壇に地歩を固める。

1936年（昭和11） 32歳　第5詩集『署名』刊。

1944年（昭和19） 40歳　湯川弘文社版「新詩叢書」17巻を編集刊行。第6詩集『龍骨』刊。

1945年（昭和20） 41歳　6月5日の空襲で自宅全焼、印南郡上荘町に避難。ここで終戦を迎え、11月須磨区離宮前町に住居を得、以来ここに住む。

1948年（昭和23） 44歳　児童詩誌「きりん」を創刊し、昭和46年まで主宰。児童文化育成を戦後の仕事とする。第7詩集『動物磁氣』刊。

1956年（昭和31） 52歳　兵庫県文化賞受賞。

1968年（昭和43） 64歳　第8詩集『そのほか』刊。

1973年（昭和48） 69歳　神戸市文化賞・紫綬褒章受賞。

1980年（昭和55） 76歳　第9詩集『ポルカマズルカ』刊。読売文学賞を受賞。

1982年（昭和57） 77歳　3月7日、脳内出血のため、神戸中央市民病院で死去。

展示品の概容

（1）竹中郁の著書

「黄蜂と花粉」「枝の祝日」「一匙の雲」
「象牙海岸」（普及版）「象牙海岸」（特装版）
「署名」「龍骨」「動物磁気」「そのほか」
「ポルカマズルカ」「竹中郁全詩集」
「子ども闘牛士」「消えゆく幻燈」
「私のびっくり箱」「巴里の手紙」「竹中郁詩集」

（2）作品発表の詩誌

戦前―「羅針」*「骰子」*「AIR POCKET」*
「POESIE」*「一家」*「羅針第二次」*
「詩と音楽」（復刻）「辻馬車」「内部」
「風神」「ドノゴトンカ」「文学」
「セルパン」「四季」

戦後―「詩人」*「ゆうとぴあ」「文学雑誌」
「火の鳥」「詩歌殿」「芸林開歩」
「嶺人形」「航海表」「こども太陽」
「おとめざ」「女性」「ローズサークル」
「高風」　（*は竹中編集の雑誌）

（3）自作の絵画など

「リトカット」「自画像」「舟」「手」「composition」「ポエムス」「曲芸一家」「コクトオ風の自画像」ほか、大森はた・山内おり所蔵の絵、浮田要三の絵、小磯良平作の「みなとまつりのポスター」など。

（4）遺品・愛用品

新発見の創作ノート、手帖、帽子、パイプ、灰皿など。ほかに竹中の幼児から晩年にいたる写真パネルを展示。

講演会のご案内

会期中に下記の要領で講演会を開催します。

日　時　3月20日（土）午後2時30分開会
場　所　芸術文化交流サロン（同ギャラリー内）
講　師　飯島耕一氏・安水稔和氏
演　題　対談「西脇順三郎と竹中郁」

是非ご参会ください。

ひょうご詩画展 2005

朝比奈宣英	岩川　昌子	岩崎　風子	大賀　二郎	大西　隆志	香山　雅代
葛城　啓子	喜尚　晃子	佐藤　勝太	じきはらひろみち	鈴木　賀恵	鈴木　濃
たかとう匡子	たかはらおさむ	高谷　和幸	高橋　博子	中川　道子	中島　友子
中原綠佐子	西海ゆう子	西川　昭五	春名　純子	福井　久子	松尾　茂夫
松下　玲子	丸本　明子	水こし町子	森本　敬子	山本　真弓	山本美代子
由良佐知子					

【2月1日現在の出展予定者】

兵庫・詩の現在展（詩誌と詩集の現況展示）

展示予定の詩誌（発行地）

Les Arizes	（尼崎）	火曜日	（神戸）	多島海	（神戸）
沙羅	（尼崎）	ア・テンポ	（神戸）	ふらくたる	（神戸）
Messier	（西宮）	MeLange	（神戸）	幻想時計	（明石）
槐	（西宮）	輪	（神戸）	別嬢	（加古川）
Contralto	（西宮）	階段	（神戸）	まほろば	（加古川）
縞蘭	（西宮）	海馬	（神戸）	文芸日女道	（姫路）
第三紀層	（西宮）	プラタナス	（神戸）	姫路文学	（姫路）
乾河	（芦屋）	貝の火	（神戸）	播火	（姫路）
風神	（芦屋）	風媒花	（神戸）	湾	（相生）
現代詩神戸	（神戸）	OTAKSA	（神戸）	草	（夢前）

（詩集・詩書等の・単行本は最新のほぼ一年分を展示します。）

◇会場のご案内◇

詩と歌謡　喜志邦三回顧展

併催　ひょうご詩画展2005
兵庫・詩の現在展

〔会 期〕 2005年3月8日（火）～3月13日（日）
（午前10時開館、午後5時閉館。但し初日は午後1時開館、最終日午後3時閉館）

〔会 場〕 県立美術館 原田の森ギャラリー東館
〒657-0837　神戸市灘区原田通3-8-30
☎078（801）1591
（最寄り駅：阪急・王子公園駅／王子動物園南側）

入場無料

（写真提供／神戸女学院大学）

主　催：兵庫県現代詩協会
後　援：兵庫県・兵庫県教育委員会・（財）兵庫県芸術文化協会
神戸市・神戸市教育委員会・神戸芸術文化会議

ごあいさつ

伊勢田史郎
（兵庫県現代詩協会会長）

わが国の詩と歌謡の領域に大きな足跡をのこされた喜志邦三さんが長逝されてから二十二年（生誕百七年）になります。

吉屋信子（作家・「良人の貞操」などで著名）、森川舟三（朝日新聞記者）とともに、投稿誌「秀才文壇」の"三秀才"と若くから呼ばれていました。その生涯の詩業には『蹄天馬』以降七冊の詩集をはじめ、訳詩集、評論集など数多くの著書があり、同人誌（『交替詩派』「再現」「灌木」）を主宰し、多くの優れた後進を育成されました。

ここから輩出した詩人には、谷口護、砂村俊、山本格郎、安水稔和、福井久子、森本敏子、小野菊恵、中村光名子、水谷なりこ、柳生千枝子、もず唱平、高橋徹、横田英子、須田剋太など多彩です。

また、歌曲の作詞も多く、「お百度こいさん」「踊子」ほか、一般に広く親しまれています。今回開催の「喜志邦三回顧展」では、詩人の多面にわたる活動を、あらためて再認識していただけることでしょう。

この回顧展を開催するにあたっては、旧「灌木」の方々や、神戸女学院大学のご協力をいただきました。とりわけ、ご遺族の喜志房雄氏と旧同人の水谷なりこ氏には貴重な資料の提供をたまわり、充実した展示となりました。記して深謝申しあげます。

なお、併催するのは、「ひょうご詩画展」と「兵庫・詩の現在展」。詩画展は本年が二回目。力作が展示されます。現在展は例年実施している詩誌、詩集の展示。会内外の方々との交流がいっそう深まることを願っての催しです。ふるってご参会ください。

喜志邦三略年譜

1898年（明治31） 3月1日大阪府堺市に生まれる。笠野重吉、ヒサの次男として生まれ、翌年7月7日父重吉の弟、喜志房吉の養子となる。養母は喜志とよ。

1915年（大正4） 17歳 大阪府立堺中学校卒業、投稿誌「秀才文壇」第5位入選。

1917年（大正6） 19歳 三木露風主宰「第三次未来」「リズム」同人となる。

1919年（大正8） 21歳 早稲田大学文学部英文学科卒業。早稲田大学文学士。9月大阪時事新報社入社。編集部勤務。

1927年（昭和2） 29歳 神戸女学院大学専任教授。翌年、千田愛子と結婚。

1930年（昭和5） 32歳 詩集『蹄天馬』刊。この頃から文化団体、放送等で講演を依頼されるようになる。

1931年（昭和6） 33歳 訳詩集『現代アメリカ詩集』、『現代イギリス詩集』刊。

1932年（昭和7） 34歳 『スペイン民謡集』、詩集『交替の時』刊。

1933年（昭和8） 35歳 詩集『雪をふむ跫音』刊。翌年評論集『現実詩派』、詩集『零時零秒』刊。

1936年（昭和11） 38歳 評論集『新詩の門』刊、国民歌謡「嫁ぐ日近く」作詞。翌年「春の唄」「村の少女」作詞。詩集『花珊瑚』刊。この頃より校歌、社歌の創作もおこなう。

1939年（昭和14） 41歳 詩集『燕泥集』、随筆集『木曜詩話』刊。日本放送協会より文芸賞を受賞。翌年、詩集『沙翁風呂』刊。

1949年（昭和24） 51歳 同人誌『交替』創刊。新人育成に努める。

1953年（昭和28） 55歳 同人誌「再現」創刊。

1955年（昭和30） 57歳 神戸女学院大学研究所所長に就任。翌年同人誌「再現」を「灌木」に改題。体裁内容改まる。

1958年（昭和33） 60歳 ホームソング「踊子」（日本ビクター32年度ヒット賞受賞）「お百度こいさん」作詞。

1959年（昭和34） 61歳 ホームソング「桜の園」作詞。翌年、唱歌「風になりたい」作詞。

1963年（昭和38） 65歳 神戸女学院大学定年退職。同校名誉教授。

1966年（昭和41） 68歳 園田学園女子大学教授（昭和50年まで）

1972年（昭和47） 74歳 西宮市民文化賞を受賞。

1983年（昭和58） 85歳 5月2日早暁、西宮市の自宅にて永眠。

展示品の概容

（1）喜志邦三の著書訳書
『蹄天馬』『交替の時』『雪をふむ跫音』
『現代アメリカ詩集』『現代イギリス詩集』
『零時零秒』『花珊瑚』『燕泥集』『沙翁風呂』他。

（2）作品発表の詩誌等
「未来」「リズム」「日本詩集」「蝋人形」「交替」
「再現」「灌木」「英語青年」ほか。

（3）レコードジャケット、楽譜ほか。

（4）自筆原稿、創作ノート。

（5）遺品、愛用品。

（6）写真パネル。

●コンサートと講演のご案内●

展示会期中の3月12日午後2時30分より同ギャラリーにおいて、コンサートと講演の催しをおこないます。是非ご参会ください。

【講　　演】喜志房雄氏（邦三氏次男）
演題：詩と歌謡　父・邦三の肖像

【コンサート】喜志邦三・名曲を歌う
「風になりたい」「村の少女」「桜の園」
「お百度こいさん」「踊子」「春の唄」
独唱：有川隆子（メゾ・ソプラノ）
伴奏：下村正彦（神戸山手大学教授）

ひょうご詩画展2006

朝比奈宣英	岩崎　風子	大賀　二郎	忍海　貴子
香山　雅代	和　比　古	喜尚　晃子	小西　　誠
佐藤　勝太	直原　弘道	鈴木　　漠	たかとう匡子
たかはらおさむ	高谷　和幸	谷田　寿郎	谷部　良一
玉井　洋子	中川　道子	中島　友子	中堂けいこ
中原緋佐子	西海ゆう子	春名　純子	福井　久子
松尾　茂夫	松下　玲子	水こし町子	森本　敬子
山本　真弓	由良佐知子		

（2月14日現在の出展予定者）

講演会と懇親会のご案内

会期中に下記の要領で講演会を催します。

【日　時】3月18日(土) 午後2:00～
【演　題】懐想のアダッツァン
【講　師】宮崎修二朗氏
（文芸評論家・旧「天秤」同人）

懇親会は講演終了後場所をJR灘駅前ロータリーの喫茶レストラン「ボニー&クライド」に移して、午後4:30頃から始めます。

【会　費】5000円

兵庫・詩の現在展（詩誌と詩集の現況展示）

展示予定の詩誌（発行地）

Les Arizes	(尼崎)	乾河	(芦屋)	ふらくたる	(神戸)
Messier	(西宮)	火曜日	(神戸)	海馬	(神戸)
D-Paradoxus	(西宮)	ア・テンポ	(神戸)	幻想時計	(明石)
槐	(西宮)	MeLange	(神戸)	短詩のはらっぱ	(明石)
Contralto	(西宮)	輪	(神戸)	別嬪	(加古川)
縞猫	(西宮)	階段	(神戸)	まほろば	(加古川)
第三紀層	(西宮)	現代詩神戸	(神戸)	文芸日女道	(姫路)
季	(西宮)	プラタナス	(神戸)	姫路文学	(姫路)
別冊關學文藝	(西宮)	多島海	(神戸)	播火	(姫路)
風神	(芦屋)	OTAKSA	(神戸)	湾	(相生)
				草	(夢前)

（詩集・詩書等の単行本は最新のほぼ一年分を展示します。）

◇会場のご案内◇

足立巻一と「天秤」の仲間たち展

併催　ひょうご詩画展
兵庫・詩の現在展

【会　期】2006年3月14日(火)～3月19日(日)
（午前10時開館、午後5時閉館。但し初日は午後1時開館 最終日午後3時閉館）

【会　場】県立美術館　原田の森ギャラリー東館
〒657-0837 神戸市灘区原田通3-8-30
☎078(801)1591
（最寄り駅：阪急・王子公園駅／王子動物園南側）

入場無料

主　催：兵庫県現代詩協会
後　援：兵庫県・兵庫県教育委員会・(財)兵庫県芸術文化協会
神戸市・神戸市教育委員会・神戸芸術文化会議

ごあいさつ

福井久子
（兵庫県現代詩協会会長）

今回兵庫県現代詩協会が開催するのは「足立巻一と『天秤』の仲間たち展」です。

足立巻一は関西学院中学部時代より、一九八五年に長逝されるまで、その文筆活動が多岐にわたっている詩人・文芸評論家です。詩集としては『夕刊流星号』以降四冊ですが、書評・旅行記・美術評論・国文学関係（特に本居宣長・春庭）の評論・編集、その他放送に係わる脚本・監修構成の仕事など枚挙にいとまもなく活躍された方です。代表作としては、『やちまた』（一九七四年刊）があり、第二十回芸術選奨文部大臣賞を受けています。やちまたなる語は八方に通じる道という意味で、本居春庭が言葉の働きを道にたとえた言葉です。この作品を掲載したのが詩誌「天秤」だったのです。

足立巻一の交友関係は広く深いものがありますが、中でも竹中郁監修の児童詩誌「きりん」創刊を通じて始まった竹中郁との交流は一九八二年の郁の死まで続いたものです。また、一九四七年に当時毎日新聞学芸部副部長であった井上靖を通じて文学者との交友関係が広がり、先程の「きりん」の発案者も井上であったことを思えば、人間の繋がりの重さを知らされます。

一九五二年二月「天秤」に「殺人事件」他一篇発表」とあり、「一九五八年に詩誌「天秤」（第二次）第一号が出る」と自筆年表に書かれています。後者の同人として、米田透・田部信・静文夫・正木利雄・高島健一・岡本善一・津高和一・桑島玄二・亜騎保の名が出ています。さらに、一九六三年、誌面がB4判になり、同人として原口ちから・宮崎修二朗・伊田耕三・徳永秀則・鳥巣郁美・三浦照子・板谷和雄が加入しています。これらの詩人たちの登場する詩誌「天秤」「関連書籍、書簡などをご紹介します。

十八日には、宮崎修二朗氏よりお話しを伺うことになっています。生々とした詩人たちの交流を通じて当時の詩活動の状況を把握できればと楽しみにしています。是非出席してご自分でお確かめ下さい。

これを開催するにあたっては、足立さんの御遺族の方や生田神社、かつての「天秤」同人の三浦照子さんはじめ多くの方々から貴重な資料・写真などを御提供いただき真に有難うございました。ここに改めて感謝申し上げます。

なお、「ひょうご詩画展」と「兵庫・詩の現在展」を併催いたします。詩画展は三年目。詩と絵画・書などのコラボレーションが新たな展開を見せることでしょう。現在展は昨年に続き、県下の詩誌・詩集の展示です。ここでの交流が一層大きな水源を生み、人々のゆたかな言葉となって溢れ出ることを願っています。

足立巻一略年譜

1913年（大正2）　当歳　6月29日、父靖一母マサヨの長男として、東京神田に生まれる。靖一は「二六新報」同人、夕刊の主筆だったが、同年10月急死。やがて母が再婚し、漢学者の祖父清三（号敬亭）祖母ヒデに育てられる。

1921年（大正10）　8歳　祖母の死去により祖父母の故郷長崎市に戻り、新町小学校に入学。6月祖父が銭湯入浴中に急死、縁戚に養われる。

1922年（大正11）　9歳　神戸在住の母の兄、堀内理一郎（薬剤師）に引き取られ、やがて母マサヨ再婚先を離れて同居。以来神戸市在住。

1927年（昭和2）　14歳　4月関西学院中学部入学。国語教師池部宗七に傾倒し、その主宰歌誌「香菓」に毎号出詠。短歌、文学全般を学ぶ。

1932年（昭和7）　19歳　3月関西学院中学部卒業。短歌より詩へ入り、詩誌「青騎兵」を亜騎保と創刊。同人に岬絃三、九鬼次郎、吉田鶴夫、冬木渉。のち「牙」「以後」と誌名を変え、戦後の「天秤」へ発展。

1934年（昭和9）　21歳　4月神宮皇学館入学。神戸詩人クラブ設立に参加するとともに、学内の文芸部委員も務め、本居春庭の研究に着手。

1938年（昭和13）　25歳　3月神宮皇学館本科国漢科卒業。神戸へ帰る。兵庫県立第二神戸商業、第二神戸高女の教授嘱託を務めるが、9月徴兵され華北山西省の前線で従軍。数次の作戦に参加。

1941年（昭和16）　28歳　召集解除となり、神戸市立第一神港商業教諭に転勤。皇学館の親友西田正の長妹淑と結婚。　宮崎氏との出会い

1943年（昭和18）　30歳　『宣長と二人の女性』（毎書房）刊。長女ゆき子誕生。

1944年（昭和19）　31歳　再招集を受けて鹿児島県に派遣され、対戦車肉薄攻撃訓練中、火薬の爆創を受けて入院。

1945年（昭和20）　32歳　敗戦により復員し、第一神港商業に復職。

1946年（昭和21）　33歳　新大阪新聞社入社。長男明誕生。以来京都支局勤務、学芸部長、編集総務を歴任するも多大の苦難を嘗める。

1948年（昭和22）　35歳　子どもの詩雑誌「きりん」の編集に参加し、竹中郁、井上靖、坂本遼、浮田要三らの親交を得る。翌年次男進誕生。

1950年（昭和25）　37歳　この頃同人詩誌「天秤」（第一次）を創刊したとの記録があるが、資料見当たらず。

1956年（昭和31）　43歳　新大阪新聞を退社し、以後文筆業。週刊誌への送稿、ラジオテレビ番組の構成、雑誌の編集などで生計を支える。取材のためほぼ全国を旅行。大阪文学学校講師となる。

1957年（昭和32）　44歳　『忍術』（平凡社）刊。

1958年（昭和33）　45歳　第一詩集『夕刊流星号』（六月社）刊。詩誌「天秤」（第二次）創刊。

1962年（昭和37）　49歳　第二詩集『石をたずねる旅』（鉄道弘報社）刊。

1964年（昭和39）　51歳　『詩のアルバム』（理論社）刊。

1965年（昭和40）　52歳　『奈良と大和路』（実業之日本社）刊。

1967年（昭和42）　54歳　『関西人』（弘文社）『大衆芸術の伏流』（理論社）刊。

1968年（昭和43）　55歳　『関西女』（文研出版）刊。

1970年（昭和45）　57歳　『鏡一九鬼次郎の青春と歌稿一』（理論社）刊。

1971年（昭和46）　58歳　第三詩集『バカらしい旅行』（理論社）刊。

1972年（昭和47）　59歳　『牛乳びんの歌』（理論社）刊。

1974年（昭和49）　61歳　『やちまた』（河出書房新社）刊。同書により第20回芸術選奨文部大臣賞を受賞。

1975年（昭和50）　62歳　大阪芸術大学講師となる。兵庫県文化賞受賞。

1978年（昭和53）　65歳　大阪芸術大学教授、神戸女子大学講師兼任。

1979年（昭和54）　66歳　神戸新聞読者文芸詩欄の選者となる。

1980年（昭和55）　67歳　大阪芸術大学教授を辞し、神戸女子大学教授となる。『立川文庫の英雄たち』（文和書房）刊。

1981年（昭和56）　68歳　『大と真』（理論社）『夕暮れに苺を植えて』（新潮社）小説『夕刊流星号』（新潮社）刊。神戸市文化賞を受賞。

1982年（昭和57）　69歳　『虹滅記』（朝日新聞社）刊。同書により第30回日本エッセイストクラブ賞を受賞。『戦死ヤアワレ一無名兵士の記録一』（新潮社）刊。大阪市文化功労者として表彰。

1983年（昭和58）　70歳　『石の星座』（編集工房ノア）刊。第四詩集『雑歌』（理論社）刊。同書により第17回日本詩人クラブ賞を受賞。竹中郁事歴調査のためヨーロッパ小旅行。

1984年（昭和59）　71歳　『親友記』（新潮社）日本現代詩文庫③『足立巻一詩集』（土曜美術社）刊。

1985年（昭和60）　72歳　神戸新聞平和賞を受賞。七月狭心症のため新須磨病院に入院。8月14日転院先の神戸市立中央市民病院で急性心筋梗塞にて死亡。ほぼ執筆を終えていた『人の世やちまた』（編集工房ノア）が49日忌を期して刊行。

死後、『学芸の大阪』『評伝竹中郁一その青春と詩の出発一』『日が暮れてから道は始まる』（編集工房ノア）ほか、旧作が文庫本として再版されている。また井上靖、司馬遼太郎両氏の命名した偲ぶ会「夕暮れ忌」が毎年8月第1週に催され、現在に至っている。（文中共著、編著省略）

展示物の概要

（1）足立巻一の著作物。
（2）詩誌「天秤」ほか雑誌類。
（3）自筆原稿、色紙など。
（4）写真パネル多数。

ひょうご詩画展2007

朝比奈宣英	岩崎　風子	大西　隆志	大賀　二郎
香山　雅代	和　比　古	小西　　誠	喜原　弘道
鈴木　　濮	たがはらおさむ	谷田　寿郎	玉井　洋子
谷部　良一	中川　道子	中島　友子	中堂けいこ
中原緋佐子	永井ますみ	丸田　礼子	春名　純子
福井　久子	松尾　茂夫	松下　玲子	水こし町子
三浦　照子	山本　眞弓	由良佐知子	

（2007年2月10日現在の出典予定者）

講演会と懇親会のご案内

会期中に下記の要領で講演会を催します。

【日　時】3月17日(土) 午後2:00～

【演　題】モダニズムと現代

【講　師】鶴岡善久氏

講師プロフィール：
1936年千葉県生。20代半ばで瀧口修造の知遇を得、一貫してシュールレアリスムに関心をもちつづける。詩集に、『肌に添って』『雷気楼の旅』など。評論集に『日本超現実主義詩論』『シュルレアリスムの発見』ほか多数。）

懇親会は講演終了後、場所をJR灘駅前ロータリーの喫茶レストラン「ポニー&クライド」に移して午後4:00頃から始めます。

【会　費】5000円

兵庫・詩の現在展（詩誌と詩集の現況展示）

展示予定の詩誌（発行地）

LesArizes	(尼崎)	火曜日	(神戸)	どぅるかまら	(神戸)
Messier	(西宮)	ア・テンポ	(神戸)	幻想時計	(明石)
D-paradoxus	(西宮)	MeLange	(神戸)	短詩のはらっぱ	(明石)
槐	(西宮)	輪	(神戸)	別嬢	(加古川)
Contralto	(西宮)	階段	(神戸)	まほろば	(加古川)
縞猫	(西宮)	現代詩神戸	(神戸)	播火	(姫路)
第三紀層	(西宮)	プラタナス	(神戸)	姫路文学	(姫路)
季	(西宮)	多島海	(神戸)	文芸日女道	(姫路)
別冊關學文藝	(西宮)	OTAKSA	(神戸)	章	(姫路)
風神	(芦屋)	ふらくたる	(神戸)	清	(相生)
乾河	(芦屋)	海馬	(神戸)		

（会員の詩集詩書と他府県会報・詞華集等も過去一年分を展示します。）

◇会場のご案内◇

神戸モダニズムの詩人たち展

併催　ひょうご詩画展
兵庫・詩の現在展

【会　期】2007年3月13日(火)～3月18日(日)

（午前10時開館、午後5時閉館。但し初日は午後1時開館 最終日午後3時閉館）

【会　場】県立美術館　原田の森ギャラリー東館

〒657-0837 神戸市灘区原田通3-8-30

☎078（801）1591

（最寄り駅：阪急・王子公園駅／王子動物園南側）

入場無料

主　催：兵庫県現代詩協会

後　援：兵庫県・兵庫県教育委員会・㈶兵庫県芸術文化協会
神戸市・神戸市教育委員会・神戸芸術文化会議・芸術文化団体 半どんの会

（相坦足穂　22・3歳頃）

ごあいさつ

福井久子
（兵庫県現代詩協会会長）

今年は「神戸モダニズムの詩人たち展」を開催します。

英国でT・S・エリオットの「荒地」が出版されたのが一九二二年（大正十一年）、フランスでアンドレ・ブルトンの「超現実主義宣言」の出版が一九二五年（大正十四年）。文学はモダニズムの方向へ大きく舵をきりました。日本では、アラゴンやエリュアール、ブルトンらの訳文が当時の文芸誌「文芸耽美」にのり、二七年にはモダニズム、シュールレアリスムの詩が「薔薇・魔術・学説」の創刊号に北園克衛や上田保等によって早くも書かれています。一九二八年になると「詩と詩論」が創刊され、十四冊まで海外の主な詩や詩人の紹介記事と、日本の詩人たちによるそれらへの詩論が展開されていきます。

このような文学交流、相次ぐモダニズム系の詩誌の創刊、加えて、西脇順三郎や竹中郁のように海外遊学中に直接うけた影響も含めて、それらは神戸にも伝播し、モダニズム運動の花が開いていきます。

〈神戸モダニズム〉という言葉は神戸やその周辺から使われはじめたものではなく、海港都市神戸の〈ハイカラ〉ぶりを多少揶揄的気分も含めて他地域の人たちが名づけたようです。しかし大正末から十五年戦争の時期、稲垣足穂を嚆矢として神戸を中心に、兵庫県下で多くのモダニズム系詩人が生まれました。竹中郁、小林武雄、亜騎保、広田善緒など下記に略歴紹介している詩人たちです。

今回はこれらの詩人たちの業績を顕彰するため、地元をはじめ、全国の図書館や文学館のご協力を得て、展示資料を発掘しました。海に開かれた神戸とモダニズムの係わりの深さを感得していただけたらと願っています。

なお、「ひょうご詩画展」と「兵庫・詩の現在展」を併催いたします。詩と絵画・書とのコラボレーションと詩誌・詩集の展示です。皆様の交流を期待しております。

神戸モダニズムの詩人たち

稲垣足穂（いながき・たるほ） 明治33年（1900）10月～昭和55年（1980）12月。大阪船場に生まれ、小学校入学時から明石に住む。当時、神戸の原田の森にあった関西学院中学部を卒業後上京、佐藤春夫の知遇を得た。大正12年、『一千一秒物語』で文壇にデビュー。『星を売る店』（大正15年）、『第三半球物語』（昭和2年）、『天体嗜好症』（昭和3年）を刊行したが、その後アルコール、ニコチン中毒により文壇を離れた。戦後復帰して、『弥勒』（昭和21年）、『ヰタ・マキニカリス』（昭和23年）、『少年愛の美学』（昭和43年）、『タルホ・コスモロジー』（昭和46年）などを刊行。

衣巻省三（きぬまき・せいぞう） 明治33年（1900）2月～昭和53（1978）8月。朝来郡栗鹿村柴生に生まれ、関西学院中学部では稲垣足穂と同級。大正末まで、現在の神戸須磨寺、西代、上筒井、会下山などに居住。上京して足穂とともに佐藤春夫の門に出入りした。早稲田大学英文科中退。詩集に『こわれた街』（昭和3年）、『足風琴』（昭和9年）がある。また、伊藤整らの「文芸レビュー」などの同人として作家活動をつづけ、同人誌「翰林」に発表した「けしかけられた男」で第一回芥川賞候補となった。著書に『パラピンの聖女』、『黄昏学校』などがある。

竹中　郁（たけなか・いく） 本名貴三郎。明治37年（1904）4月～昭和57（1982）年3月。神戸市兵庫区に生まれ、須磨区に定住。神戸二中（現・兵庫高校）を経て、関西学院英文科在学中に福原清と詩誌「羅針」を創刊、第一詩集『黄蝶と花粉』を出版。昭和3年中学時代の級友、画家の小磯良平と渡欧、パリを中心に各地を2年間遍歴しながら西欧の新芸術を吸収した。帰国後出版した詩集『象牙海岸』『署名』によって、モダニスト詩人としての評価を確立した。戦後は井上靖の発案で児童詩誌「きりん」を主宰し、関西学院時代の同級生坂本遼や足立巻一らの協力を得て、児童の詩や作文教育に大きな足跡を残した。

小林武雄（こばやし・たけお） 明治45年（1912）2月～平成14年（2002）5月。神戸生まれ。昭和6年頃より谷外赴夫のペンネームで、西条八十主宰の「愛誦」に詩の投稿をはじめ、翌年詩誌「詩創元」を創刊、第一詩集「敬虔しき朔風」を出版した。昭和12年光本兼一が三次にわたって刊行した「神戸詩人」を引き継いで第四次「神戸詩人」の編集発行人となると同時に、神戸詩人クラブを結成。シュルレアリスム手法による風刺詩を書いた。昭和15年3月神戸詩人事件に連座、検挙されて懲役二年の刑を受けた。戦後いちはやく詩誌「火の鳥」を創刊、神戸周辺の詩人たちを結集し、兵庫県下の戦後詩運動の魁となった。
戦後の詩集に『否の自動記述と一善の料理人』『若い蛇』があり、日本現代詩人会により先達詩人として顕彰された。

広田善緒（ひろた・よしお） 大正3年（1914）10月～昭和49年（1974）1月。西脇市生まれ。家業は山林を所有する製材業。小野中学校卒業後上京し、両親に経済学部と偽って大学の美術学部に通うが、発覚し、郷里へ連れ戻される。昭和12～13年にわたって、東京の詩誌「新領土」や「純粋詩」に作品を発表しながら地域の第四次「神戸詩人」にも参加。第一詩集『乳母車椅譚』（姫路騒馬社・昭和13年）を出版。その直後に召集され、当時の朝鮮・中国を転戦する。マラリアや結核に冒され一旦帰還するが、再度召集され敗戦を南朝鮮で迎えた。その復員時に被爆した広島駅の惨状をみた広田の感慨を軸に飯島耕一が「硫酸の日々」という小説を書いている。戦後は戦時に得た病を養いながら「火の鳥」に参加、その終刊後の昭和25年から自ら詩誌「ＭＥＮＵ」を創刊、かつて所属した「新領土」のモダニズム詩の批判的発展を目指した。戦後の詩集に、『偽雅歌』（1952）、『わが伝説曲』（1964）、『見えない習俗』（1970）、『とらわれの唄』（1976）がある。

亜騎　保（あき・たもつ） 本名、橋本宇一。大正4年（1915）9月～平成4年（1992）2月。神戸市兵庫区生まれ。第二神戸商業卒。昭和7年神戸で詩誌「青騎兵」を足立巻一らと創刊、地域における詩作活動と同時に、百田宗治らの「椎の木」（第三次）、上田保らの「新領土」や「純粋詩」「文芸汎論」など中央の詩誌にも参加し、昭和13年頃までとりわけ活発な詩作活動を展開した。昭和15年3月神戸詩人事件に連座、懲役2年（執行猶予）の刑を受けた。戦後、「火の鳥」を経て、足立巻一らと詩誌「天秤」を創刊。純粋で独自なシュルレアリスム詩を書きつづけた。詩集に『動物の舌』（1961）がある。

静　文夫（しずか・ふみお） 本名、山縣琛男。明治42年（1909）2月～平成3年（1991）7月。神戸市生まれ。貿易業務に携わりながら昭和7年頃から地域の同人詩誌「甲南詩派」「オペラ」「風神」などの創刊に関わって詩作し、また東京の北園克衛らの「マダム・プランシュ」にも参加。戦後は亜騎保、足立巻一らの詩誌「天秤」同人として、終生独自なモダニズム詩の創作をつづけた。詩集に、『季節』（1970）、『彩眠帖』（1970）、『旅行者』（1972）、『季節』（1985）、死後遺族と三浦照子が編んだ遺稿詩集『天の罠』（1992）がある。

芦塚孝四（あしづか・たかし） 本名、副島敬郎。大正9年（1920）～昭和44年（1969）7月。相生市生まれ。生家は老舗の仕出し料理店。姫路商業を卒業した昭和12年、当時神戸高商の学生だった中桐雅夫が創刊した詩誌「ＬＵＮＡ」（翌年「ＬＥ　ＢＡＬ」と改題）に参加。同人に衣更着信、田村隆一らがいて、後に鮎川信夫、三好豊一郎も参加した（戦後の荒地グループの前身という観がある）。また翌13年には「新領土」にも参加、ほぼ隔月間隔で作品を発表していた。昭和16年に応召し、旧満州に赴くが翌年胸部疾患で内地送還。除隊となる。播磨造船所に入社したが、敗戦によって退社。病を養いながら家業に従事。戦後「火の鳥」、「ＭＥＮＵ」に参加して詩作をつづけた。詩集『愛の歌』は夫人の依頼で広田善緒の編纂によって、死後半年後に出版された。

モダニズム系の詩人は、ほかにも福原清、山村順、亀山勝、水町百意、など数多くいますが、今回は大正初期生まれの詩人たちに中心をしぼりました。

展示物の概要

(1)関連詩人たちの詩集と詩誌　(3)時代別解説・引用などのパネルほか。
(2)肖像写真や集合写真のパネル

ひょうご詩画展2008

石井　習	香山　雅代	和　比　古	小西　誠
紫野　京子	直原　弘道	鈴木　濃	たがはらおさむ
田中　敏弘	谷部　良一	谷田　寿郎	寺田　操
西海ゆう子	福井　久子	松尾　茂夫	松下　玲子
丸本　明子	水こし町子	森本　敏子	山本　眞弓
山本美代子	由良佐知子	神田　さよ	岩崎　風子
高谷　和幸	中島　友子	三浦　照子	ほか

（2月11日現在の受付まで）

講演会と懇親会のご案内

会期中に下記の要領で講演会を催します。

【日　時】3月15日(土) 午後2時～

【演　題】「四季」の想い出

【講　師】杉山平一氏
（当会顧問／旧「四季」同人）

懇親会は講演終了後、場所をJR灘駅前ロータリーの喫茶レストラン「ポニー&クライド」に移して午後4時頃から始めます。

【会　費】5000円

兵庫・詩の現在展（詩誌と詩集の現況展示）

展示予定の詩誌（発行地）

LesArizes	(尼崎)	風神	(芦屋)	海馬	(神戸)
Messier	(西宮)	ア・テンポ	(神戸)	別嬢	(加古川)
D-paradoxus	(西宮)	MeLange	(神戸)	まほろば	(加古川)
槐	(西宮)	階段	(神戸)	播火	(姫路)
Contralto	(西宮)	現代詩神戸	(神戸)	姫路文学	(姫路)
綿猫	(西宮)	プラタナス	(神戸)	文芸日女道	(姫路)
第三紀層	(西宮)	多島海	(神戸)	清	(相生)
夜凍河	(西宮)	それから	(神戸)		
鶴亀	(西宮)	惟	(神戸)		
別冊鶴學文藝	(西宮)	OTAKSA	(神戸)		
乾河	(芦屋)	ふらくたる	(神戸)		

（会員の詩集詩書と他府県会報・詞華集等も過去一年分を展示します。）

◇会場のご案内◇

「四季」と兵庫の詩人たち展

併催　ひょうご詩画展
兵庫・詩の現在展

【会　期】2008年3月11日(火)～3月16日(日)
（午前10時開館、午後5時閉館。但し初日は午後1時開館 最終日午後3時閉館）

【会　場】県立美術館　原田の森ギャラリー東館
〒657-0837 神戸市灘区原田通3-8-30
☎078(801)1591
（最寄り駅：阪急・王子公園駅／王子動物園南側）

入場無料

主　催：兵庫県現代詩協会
後　援：兵庫県・兵庫県教育委員会・財団法人兵庫県芸術文化協会・日本現代詩人会
神戸市・神戸市教育委員会・神戸芸術文化会議・芸術文化団体 半どんの会

津村信夫(昭和14年頃)

ごあいさつ

福井久子
（兵庫県現代詩協会会長）

昨年の企画展「神戸モダニズムの詩人たち展」に引き続いて、今年は「『四季』と兵庫の詩人たち展」を開催します。

芸術的反逆精神の一種であり、批評精神でも、また、主知的な方法による探求精神でもあったモダニズムの運動として一九二八年に「詩と詩論」が創刊され、それに関連、触発された詩人たちを昨年は紹介しましたが、今年はこの運動に投じた詩人たちの中から抜け出して伝統的な抒情的傾向にむかった詩人たちを取り上げます。

三好達治、丸山薫、堀辰雄らが中心となって詩誌「四季」（第二次）を一九三四年に刊行。やがて中原中也、津村信夫、立原道造、竹中郁、杉山平一らを加えて新しい抒情詩を形成していきます。この抒情的傾向は主知主義に裏付けされたものですが、丸山薫の言葉「詩はあくまでも知性と感性とのバランスに於てのみ」完成するものであるというところに「四季」派の詩人たちの方向性をうかがい知ることができます。

今回はこの「四季」派の詩人たちの中から兵庫とゆかりのある三人の詩人、津村信夫、竹中郁、杉山平一を中心に資料を展示、紹介します。この企画を可能とするにあたって貴重な資料や助言をいただきました津村信夫の遺児春木初枝氏、竹中郁ご遺族、また杉山平一氏からは資料のみならず記念講演までお引受けいただき、感謝申上げます。この企画展を通じて二〇〇八年に生きている我々の詩のルーツに思いを馳せ、詩の現在を、言葉の生きた力を確認する一助になればと願っています。

昨年同様「ひょうご詩画展」と「兵庫・詩の現在展」（詩誌と詩集の現況展示）を同時開催いたします。ご高覧いただければ幸いです。

◆詩誌「四季」の概要

「四季」は太平洋戦争前後の昭和初期に、モダニズムやシュルレアリスムの洗礼を受けながらも、主知的な抒情詩復興機運の中枢として一世を風靡した同人詩誌で、「四季」派の呼称は文学史上、抒情詩派の同義語として定着した。　第一次「四季」は昭和8年堀辰雄によって創刊、全2冊。詩文が中心で、川端康成、横光利一のほか、堀口大學や小林秀雄の訳文を載せる。

第二次は同人制に改め、昭和9年～19年、全81冊。「三好達治・丸山薫・堀辰雄編集」と明記して、モダニズム運動の行き過ぎを是正し、知性的な美意識にもとづく抒情詩の確立をめざした。第15号（昭和11年）からは同人組織制を明確にして、それまでの同人三好、丸山、堀、津村、立原に加えて、萩原朔太郎、竹中郁、中原中也、桑原武夫らを同人に迎え、以後、室生犀星、伊東静雄、保田与重郎、神保光太郎、呉茂一、杉山平一らが参加した。詩運動として明確な旗印を掲げることはなかったが「永遠不易な詩の高き伝統の継承」と「清純の精神と正しき態度」に同調する人々の友情の集まりという性格を内外に強調しつつ飛躍的に発展した。

第三次「四季」は第二次大戦後、昭和21～22年、全5冊。堀辰雄編集の純文芸雑誌として角川書店から再刊され、同人制は採用せず、執筆者は堀の親しい文学者のみに限定したが堀の病気により中断。第四次「四季」は昭和42～50年、全15冊。神保光太郎、丸山薫、田中冬二、阪本越郎らによって復刊され、竹中郁、杉山平一、井伏鱒二ら旧同人のほか、伊藤桂一、井上靖、堀辰雄夫人多恵子、室生朝子、萩原葉子など計23名で再出発、潮流社（八木憲爾）を版元に編集人丸山薫の死去まで続刊され、三好達治、中原中也、立原道造特集や阪本越郎追悼号、丸山薫追悼号など、文学史上の貴重な資料を数多く提供した。

◆兵庫ゆかりの「四季」主要詩人

津村信夫（つむら・のぶお）　明治42年（1909）1月～昭和19年（1944）6月。神戸市葺合区熊内通生まれ。父秀松は法学博士、神戸高商（現神戸大学）教授だったが、後に実業界に入り大阪鉄工所（現日立造船）社長に就任。兄の秀夫はペンネーム「Q」で知られる映画評論家。雲中小学校、神戸一中（現神戸高校）を経て、慶応大学へ進み、文学部の教授西脇順三郎に師事した。「セルパン」などに発表した詩が注目され、堀辰雄、室生犀星、三好達治などの知遇を得る。最愛の姉道子との死別の悲しみを主題にした第一詩集『愛する神の歌』（昭和11年四季社刊）が好評を博した。「四季」創刊に際して立原道造とともに堀辰雄を助け、以後編集同人として活躍。他に詩集『父のゐる庭』『ある遍歴から』、エッセイ集『戸隠の絵本』など。昭和19年アディスン病と診断され、東京聖路加病院にて没。

竹中　郁（たけなか・いく）　本名、育三郎。明治37年（1904）4月～昭和57年（1982）3月。神戸市兵庫区に生まれ、須磨区に定住。神戸二中（現兵庫高校）を経て、関西学院英文科在学中に福原清と詩誌「羅針」を創刊、第一詩集『黄蜂と花粉』を出版。昭和3年中学時代の級友、画家の小磯良平と共に渡欧、パリを中心に二年余各地を遍歴しながら西欧の新芸術を吸収。帰国後出版した詩集『象牙海岸』、『署名』によってモダニズム詩人の評価を確立した。戦後は井上靖の発案で児童詩誌「きりん」を主宰し、関西学院の同級生坂本遼や足立巻一らの協力を得て、児童の詩や作文教育に大きな足跡を残した。他に詩集『動物磁気』『ポルカ　マズルカ』やエッセイ集、児童書など多数。

杉山平一（すぎやま・へいいち）　大正3年（1914）神戸三菱電気の技術者の父が猪苗代水力発電所建設のため出向していた会津若松で生まれ、翌年神戸へ戻る。大阪北野中学から旧制松江高校を経て、東京帝国大学文学部美学美術史科在学中に今村太平、川島雄三らと同人誌「映画集団」を創刊、映画評論の執筆と同時に、第二次「四季」に詩を投稿し、三好達治、津村信夫、立原道造らを識り、同人となる。卒業後父の興した尼崎精工を手伝いながら昭和16年第2回中原中也賞、昭和18年第一詩集『夜學生』で文芸汎論賞を受賞。戦後会社の倒産により辛酸を味わうが、帝塚山学院大学教授などを務め、詩作と映画評論の分野で今なお活動をつづけている。著書多数。

ひょうご詩画展2009

岡部　由子	大賀　二郎	香山　雅代	和　比　古
小西　　誠	紫野　京子	直原　弘道	鈴木　　漠
たかはらおさむ	谷部　良一	谷田　寿郎	高谷　和幸
戸部　多実	永井ますみ	西海ゆう子	福井　久子
福永　祥子	松尾　茂夫	松下　玲子	丸本　明子
水こし町子	森本　敏子	山本　眞弓	山本美代子
由良佐知子	三浦　照子	ほか　（2月3日現在の受付まで）	

講演会と懇親会のご案内

会期中に下記の要領で講演会を催します。

【日　時】3月14日(土) 午後2時～

【演　題】リアリズムの深淵
　　―林喜芳と高島洋を中心に―

【講　師】たかとう匡子氏

懇親会は講演終了後、場所を近くの「ロイヤル・ホスト」西灘店に移して午後4時頃から始めます。

【会　費】4000円

兵庫・詩の現在展（詩誌と詩集の現況展示）

展示予定の詩誌（発行地）

Les Arizes	(尼崎)	乾河	(芦屋)	ア・テンポ	(神戸)
EDGING	(宝塚)	Melange	(神戸)	海馬	(神戸)
D-paradoxus	(西宮)	火曜日	(神戸)	まほろば	(加古川)
Contralto	(西宮)	現代詩神戸	(神戸)	別嬢	(加古川)
縞猫	(西宮)	プラタナス	(神戸)	Loggia	(加西)
第三紀層	(西宮)	多島海	(神戸)	文芸日女道	(姫路)
夜凍河	(西宮)	それから	(神戸)	播火	(姫路)
鶴亀	(西宮)	惟	(神戸)	姫路文学	(姫路)
別冊關學文藝	(西宮)	OTAKSA	(神戸)	清	(相生)
Messier	(西宮)	階段	(神戸)		
風神	(芦屋)	ふらくたる	(神戸)		

（会員の詩集詩書と他府県会報・詞華集等も過去一年分を展示します。）

◇会場のご案内◇

リアリズムの詩人たち展

併催　ひょうご詩画展
　　兵庫・詩の現在展

【会　期】2009年3月10日(火)～3月15日(日)

（午前10時開館、午後5時閉館。但し初日は午後1時開館 最終日午後3時閉館）

【会　場】県立美術館　原田の森ギャラリー東館

〒657-0837 神戸市灘区原田通3-8-30

☎078(801)1591

（最寄り駅：阪急・王子公園駅／王子動物園南側）

入場無料

主　催：兵庫県現代詩協会

後　援：兵庫県・兵庫県教育委員会・財団法人兵庫県芸術文化協会・日本現代詩人会
　　神戸市・神戸市教育委員会・神戸芸術文化会議・芸術文化団体 半どんの会

（イオム同盟の同人たち）

ごあいさつ

福井久子
（兵庫県現代詩協会会長）

兵庫県現代詩協会が企画開催する兵庫県ゆかりの詩人たち展も二〇〇一年から今年で九年目を迎えます。竹中郁にかかわる展示が三回、喜志邦三の回顧展、足立巻一と「天秤」の仲間たち展、神戸モダニズムの詩人たち展、「回季」と兵庫の詩人たち展と現代日本詩と深くかかわる詩人たちを多く取りあげてきました。そして今回は「リアリズムの詩人たち展」として、私たちが今まで展示してきた詩人たちと時代を同じくしながら言語表現の芸術性、反逆性ではなく、生活に密着した社会性を前面に押し出してきた詩人たちを対象とした展示をめざしています。

彼らは「イオム同盟」に拠った向井孝、柳井秀、高島洋など関西のアナキストたちであり、生活の底から文学に向かった林喜芳です。彼らの詩は二十一世紀に生きる私たちにも迫ってくるものがあります。アメリカから端を発した百年に一度と言われる経済危機の中、日本でも多数の解雇者が充分な社会保障もないまま寒空に放り出されるといった現在の世界に生きている者たちと根をひとつにするものが彼らの詩行にあるからと思われます。

また、神戸と深い関係のあるキリスト教の伝道師であり、社会事業にも力を尽くしながら詩作を残した賀川豊彦にも眼を向けています。

以上の企画を可能にするにあたって貴重な資料や助言をいただいた多くの方々、神戸文学館に感謝申上げます。十四日には、たかとう匡子氏に講演をしていただきます。

昨年同様「ひょうご詩画展」と「兵庫・詩の現在展」を併催します。詩画展は詩と書、写真や絵画のコラボレーション、現在展は県下の詩誌、詩集の展示です。皆様との交流を期待しています。

◇賀川豊彦（1888～1960）

1888（明治21）年神戸に生まれ、徳島で育つ。旧制徳島中学校時代にキリスト教に入信。伝道師を志し、明治学院高等部神学予科を経て神戸神学校に進み、在学中から神戸新川のスラム街で路傍伝導を始める。

その後渡米してプリンストン大学、プリンストン神学校で学び、帰国後ふたたび新川のスラム街で活動をつづけた。

1920（大正9）年出版した自伝的小説『死線を越えて』が大ベストセラーになり、世間に賀川の名を広めた。また同年、労働者の生活安定を目的に神戸購買組合（現在のコープこうべ）を設立。折から神戸では三菱造船所や川崎造船所で労働争議が発生し、その労働組合運動を指導したり、日本農民組合の設立にも主導的に参画した。

1923（大正12）年9月関東大震災の直後、直ちに被災地に入り、本所にテントを張って仲間たちと長期にわたるボランティアの救援活動を行なっている。

戦後は東久邇内閣の参与や勅撰貴族院議員などを務め、日本社会党の設立にも参画した。晩年は世界連邦運動に取り組み、ノーベル平和賞候補にも推薦されたようである。

その間も精力的に多くの著作を著し、詩集も与謝野晶子の序文のある『涙の二等分』や『永遠の乳房』など四冊がある。また、1981年には『賀川豊彦全集』24巻がキリスト新聞社から刊行されている。

◇詩人集団 イオム同盟

戦後姫路を拠点に結成された詩文学運動。1948（昭和23）年3月向井孝、山口英、柳井秀3人で創刊された詩誌「ＩＯＭ」は後に順次、高島洋、生田均、崎本正が参加した。

彼らは発足時に詩法上の盟約を行なった。①口語で書く。文語的口語をさけて、会話的口語をつかう。②身の回りの出来事、身近な関心事のなかに詩の素材、対象を見つける。③詩的な言い回しをさける。平明な表現、散文的叙述で手短く、要領のよい事務記録的な明瞭性適確さを追求する。④詩以前の思想、世界観などを共同で追求する。⑤同盟での活動を最優先する。⑥存続期間を10年とする。

彼らの多くが1920年前後に生まれ、物心がついた頃にはすでに15年戦争が始まっていた。若くして召集をうけ、気がつくと戦争に負けていた。上記の盟約には自らの眼で状況を観察し、表現することによって、共同認識を持とうとするつよい意欲が表われている。向井と山口は大阪の旧制商業学校の同級生で当初俳句仲間として親交、ともにエスペラントを学び、アナキズムに接近していて、「ＩＯＭ」創刊の前年には日本アナキスト連盟に加入していた。因みにＩＯＭという語は「ちょっとだけ」というエスペラントの相関詞である。

1957年イオム同盟は盟約の10年目を迎え、2月「ＩＯＭ」56集を発行し、10月『定本ＩＯＭ同盟詩集』（コスモス社）を刊行して完結した。

その後も交流はつづけながらも、各人がそれぞれの分野に活動の場を広げていった。現在の生存者は生田均一人となった。

◇林　喜芳（1908～1994）

1908（明治41）年神戸の東川崎町に生まれ、高等小学校を卒業直前に中退。市役所の給仕を振り出しに、主として印刷所の植字工として働き、10代中頃から詩作を始め、投稿したり仲間と同人誌を出したりしたが、次第に戦時色が濃くなり中断。

敗戦を機に勤務先が解散になり、三木の刃物や日用品などを売る露天商人になる。1958（昭和33）年51歳にして第一詩集『露天商人の歌』を出版。翌年、月刊詩誌「現代詩」4月号が詩集全編を転載して紹介し、全国的な評価を受けた。同年『続露天商人の歌』を出版。以後神戸周辺の雑誌や新聞の要請に応じて、詩とエッセイを精力的に執筆しつづけた。エッセイ集に『わいらの新開地』、『香具師風景走馬燈』、『神戸文芸雑兵物語』、選詩集『林喜芳詩集』などがある。

ひょうご詩画展2010

阿部　由子	井之上幸代	岩崎　風子	香山　雅代
和　比　古	かただときこ	小西　　誠	紫野　京子
直原　弘道	鈴木　　潢	たがはらおさむ	谷部　良一
谷田　寿郎	玉井　洋子	戸部　多実	永井ますみ
中堂けいこ	中島　友子	福井　久子	福永　祥子
松尾　茂夫	松下　玲子	三浦　照子	水こし町子
山本　眞弓	由良佐知子	ほか（2月10日現在の受付まで）	

講演会と懇親会のご案内

会期中に下記の要領で講演会を催します。

【日　時】3月13日(土) 午後2時～

【演　題】活字表現としての詩

【講　師】季村敏夫 氏

懇親会は講演終了後、場所を近くの「ロイヤル・ホスト」西灘店に移して午後4時頃から始めます。

【会　費】3000円

兵庫・詩の現在展（詩誌と詩集の現況展示）

展示予定の詩誌（発行地）

Les Arizes	(尼崎)	乾河	(芦屋)	ア・テンポ	(神戸)
EDGING	(宝塚)	Melange	(神戸)	海馬	(神戸)
D-paradoxus	(西宮)	火曜日	(神戸)	まほろば	(加古川)
Contralto	(西宮)	現代詩神戸	(神戸)	別嬢	(加古川)
綿毛	(西宮)	プラタナス	(神戸)	Loggia	(加西)
第三紀層	(西宮)	多島海	(神戸)	文芸日女道	(姫路)
夜凍河	(西宮)	それから	(神戸)	播火	(姫路)
鶴亀	(西宮)	惟	(神戸)	姫路文学	(姫路)
別冊關學文藝	(西宮)	OTAKSA	(神戸)	湾	(相生)
Messier	(西宮)	階段	(神戸)		
風神	(芦屋)	ふらくたる	(神戸)		

（会員の詩集詩書と他府県会報・詞華集等も過去一年分を展示します。）

◇会場のご案内◇

兵庫の戦後詩（1945～1960）展

併催　ひょうご詩画展
兵庫・詩の現在展

【会　期】2010年3月9日(火)～3月14日(日)

（午前10時開館、午後5時閉館。但し初日は午後1時開館 最終日午後3時閉館）

【会　場】県立美術館　原田の森ギャラリー東館

〒657-0837 神戸市灘区原田通3-8-30

☎078（801）1591

（最寄り駅：阪急・王子公園駅／王子動物園南側）

入場無料

主　催：兵庫県現代詩協会

後　援：兵庫県・兵庫県教育委員会・財団法人兵庫県芸術文化協会・日本現代詩人会
神戸市・神戸市教育委員会・神戸芸術文化会議・芸術文化団体 半どんの会

（富田砕花・小林武雄・竹中郁）

ごあいさつ

三宅　武
（兵庫県現代詩協会会長）

兵庫県現代詩協会が企画開催する兵庫県ゆかりの詩人たち展は、今年で十年目となります。今年は、一九四五年の敗戦から六〇年安保までの約十五年間を区切り、「兵庫の戦後詩展」として催します。

十五年間は、大震災から今年までと同じ時間ですが、戦後のそれは、大変動の時代です。

一九四五年は、日露戦争終結からも四十年目です。物心ついた年齢で日露戦争を体験した人たちは、まだ五十台で、周りに多く健在でした。

当時の詩人たちは、青春期に明治、大正、戦前の昭和の詩に接してきました。検閲、伏字、発禁、逮捕、投獄等のハードルを越えた書物でした。翻訳された「悪の華」にも伏字があった時代です。

予科練経験をもつ詩人、故桑島玄二氏は「戦前、女が同人雑誌をやるのは大変なことだった」と語ったことがありました。新憲法公布とはいえ、思想、表現の自由が一挙に花開いたわけではありません。封建遺制が十分に残る冬が過ぎ、後遺症の雪が降る「春の前」。そんな時間が、一九六〇年までだったといえます。

記憶と記録の十五年。職域からも、先輩詩人に続いて現れた詩人たち。詩誌の多くはガリ版でしたが、この時期から邦文タイプが現れました。詩集は活版印刷で高価なものでした。なにしろ、東証ダウが九百円で「大台乗せ」のころ、トピックスはまだ数年後。そんなころの「詩の世界」です。

若い詩人が多くなったのと同時に、女性の詩人も増えたのも、注目したいことです。

当日、講演をしていただく季村敏夫氏は、近著『山上の蜘蛛』で、膨大な資料を駆使、広範かつ綿密な考証を重ねておられます。今回のテーマにふさわしい講師です。多くの方のご来場をお待ちします。

神戸・兵庫の戦後詩（1945～1960）

敗戦直後から戦後文学、戦後詩が始まったと言えるかどうかよく分からないが、都市部の住民たちの多くは空襲で家を焼かれ、職を失い、家族の大黒柱が戦死した状況の中で、人々はとりあえず暮らしの立直しが最優先だっただろう。

敗戦当時に兵庫県在住の詩人を何人かあげると、最高齢者は内海信之（たつの）60歳、富田砕花（芦屋）56歳、喜志邦三（西宮）47歳、竹中郁（神戸）と坂本遼（加東）は42歳、小林武雄（神戸）33歳、足立巻一（神戸）32歳、杉山平一（芦屋）30歳だった。

敗戦の翌年（1946年）9月、小林武雄は詩誌「火の鳥」を創刊し、富田砕花、竹中郁、井上靖、広田善緒、足立巻一、能登秀夫、竹内武男、亜騎保、芦塚孝四、伊田耕三ら戦前から詩作をつづけてきた詩人たちが作品を寄せている。

小林は1937（昭和12）年から「神戸詩人」を編集発行し、1940（昭和15）年いわゆる神戸詩人事件によって逮捕起訴され、懲役3年の判決をうけ、服役後敗戦まで徴用工として働いていた。上記執筆者のうち、竹内武男は主犯格として懲役5年、亜騎保は懲役2年（執行猶予3年）、広田善緒と伊田耕三は外地で応召中、中桐雅夫は東京の大学へ編入して神戸を離れていたので、逮捕立件を免れた。

後に作家として大成する井上靖はこの時期「火の鳥」に最も多く詩を寄せているが、小林は「神戸詩人」創刊時井上に同人参加を勧誘する手紙を出したが、井上は応召出征中だった。内地にいて参加していれば当然事件に巻きこまれていただろう。

このように壮年期の詩人たちが再結集した詩誌の発行が始まる一方で、個々の詩人たちの周りに詩作を志す十代から二十代の若者が集まるようになり、1947（昭和22）年には竹中郁の指導を受けて藤本義一らの「航海表」が、小林武雄の周辺に集まった中村隆、伊勢田史郎、西本昭太郎、山本博繁らは「クラルテ」など数誌を神戸で創刊した。特に指導者はいなかったが、向井孝、山口英、柳井秀、高島洋ら若いアナキストの詩人同盟「IOM」が姫路で発足したのもこの年である。

さらに2年後1949（昭和24）年には西宮在住の喜志邦三を中心としたグループが「交替」（後に「交替詩派」）を創刊した。

やがてこれらの詩誌は小林グループが広田善緒の創刊した「MENU」に合流し、更に中村、伊勢田らの「輪」や西本昭太郎の「粒」に分かれていく。「交替詩派」も能登秀夫ら旧国鉄職員グループが「さんたん」（後に「鷲」「浮標」）と喜志グループの「再現」（後に「灌木」）に分かれていく。

1950年代に入ると、「鎖」（内田豊清、丸本明子ら）、「ぽえとろ」（安水稔和）、「木賃宿」（なかけんじ）、「ぷらたなす」（九和敬介、瑛二郎）、「月曜日」（高島菊子）、「天蓋」（皆光茂、金田弘）、「ONLY　ONE」（君本昌久）、「海」（岡田兆功）などが続々と創刊された。

またこの頃には大きな職場や地域単位での文化サークル活動が活発になり、大江昭三の神戸詩話会、「輪」同人が別組織として始めた「現代詩神戸研究会資料」（「現代詩神戸」と改名）、君本昌久が市民同友会を拠点に創刊した「状況」が合評会用冊子として創刊された。この頃になると、用紙の需給や印刷事情もかなり良くなっていたもののまだ多くは謄写印刷だった。

個人詩集が出版されるようになったのもこの頃からである。広田善緒『偽雅歌』、桑島玄二『目測について』、伊勢田史郎『エリヤ抄』、なかけんじ『黄色い眼』、高島菊子『花形株』、安水稔和『存在のための歌』、福井久子『海辺でみる夢』、西本昭太郎『庶民考』、君本昌久『讃の破片』、岡田兆功『ドレミファ練習』などが続々と出版された。

1950年代も後半にもなると、昭和一桁末から二桁前半生まれの台頭の兆しも感じられるようになる。1958年刊の鈴木漠詩集『星と破船』や翌年には阿部千歳詩集『ありあ』が出版されている。

そしていよいよ日米安保条約の賛否をめぐって、多くの日本人が高揚と挫折を味わう1960年を迎えることになる。あれからちょうど半世紀が過ぎたのである。

今回は神戸兵庫の戦後詩史として、その15年間を対象に資料と写真パネル等で振り返ることとする。　（文中敬称略）

ひょうご詩画展2011

阿部　由子	岩崎　風子	香山　雅代	和　比　古
神田　さよ	小西　　誠	紫野　京子	鈴木　漢
たかはらおさむ	谷部　良一	谷田　寿郎	玉井　洋子
戸部　多実	永井ますみ	中島　友子	福井　久子
福永　祥子	松尾　茂夫	松下　玲子	三浦　照子
水こし町子	山本　眞弓	由良佐知子	

ほか（2月15日現在の受付まで）

講演会と懇親会のご案内

会期中に下記の要領で講演会を催します。

【日　時】3月19日(土) 午後2時～

【演　題】対談：詩誌「蜘蛛」の時代

【講　師】伊勢田史郎 氏×安水稔和 氏

懇親会は講演終了後、場所をJR灘駅北側ロータリーの喫茶「春秋」に移して午後4時頃から始めます。

【会　費】3000円

兵庫・詩の現在展（詩誌と詩集の現況展示）

展示予定の会員所属詩誌（発行地）

Les Arizes	(尼崎)	ア・テンポ	(神戸)	淡路島文学	(洲本)
EDGING	(宝塚)	Melange	(神戸)	まほろば	(加古川)
青い麦	(西宮)	火曜日	(神戸)	別嬢	(加古川)
Contralto	(西宮)	現代詩神戸	(神戸)	Loggia	(加西)
綺猫	(西宮)	プラタナス	(神戸)	カフェエクリ	(高砂)
第三期層	(西宮)	多島海	(神戸)	文芸日女道	(姫路)
鶴亀	(西宮)	ENTASIS	(神戸)	姫路文学	(姫路)
Messier	(西宮)	惟	(神戸)	RIVIERE	(大阪)
乾河	(芦屋)	OTAKSA	(神戸)	花筏	(東京)
階段	(神戸)	風麗	(神戸)		
あむの青通信	(神戸)	海馬	(神戸)		

（会員の詩集詩書と他府県会報・詞華集等も過去一年分を展示します。）

◇会場のご案内◇

詩誌「蜘蛛」の仲間たち(1960～1965)展

併催　ひょうご詩画展
兵庫・詩の現在展

【会 期】2011年3月15日(火)～3月20日(日)

（午前10時開館、午後5時閉館。但し初日は午後1時開館 最終日午後3時閉館）

【会 場】県立美術館　原田の森ギャラリー東館

〒657-0837 神戸市灘区原田通3-8-30

☎078 (801) 1591

（最寄り駅：阪急・王子公園駅／王子動物園南側）

入場無料

主　催：兵庫県現代詩協会

後　援：兵庫県・兵庫県教育委員会・財団法人兵庫県芸術文化協会
神戸市・神戸市教育委員会・神戸芸術文化会議・芸術文化団体 半どんの会

ごあいさつ

三宅　武
（兵庫県現代詩協会会長）

兵庫県現代詩協会が企画開催する「兵庫県ゆかりの詩人たち展」の今年のテーマは、〈『蜘蛛』の仲間たち展〉です。詩誌『蜘蛛』は一九六〇（昭和三十五）年に、当時三十代だった君本昌久氏（一九二八～一九九七）、中村隆氏（一九二七～一九八九）と、今回講演をいただく、伊勢田史郎氏・安水稔和氏の、四人の詩人たちによって立ち上げられました。『蜘蛛』の刊行とともに、関連した文化活動にも力が注がれます。

創作者であると同時に、詩に関する膨大な書の整理・紹介も行い、かつ、世に出版し、同時代人たちに伝えることにも熱心でした。すなわち、「創る」ことと、「伝える」ことが、表裏一体の集団であったことが、いまになってわかるのです。

『蜘蛛』の活動が、続く世代に、いかに多くの詩の心を残してくれたことが。いま、私たち兵庫県現代詩協会会員の、平均的な世代のほとんどは、青春の一ページに、「蜘蛛の絲」にからめられた一瞬があったと思われてなりません。

『蜘蛛』が活動した一九六〇年代、このころ誕生された人は、いま五十歳前後。俗世間的な振り返りをするなら、沖縄県へ行くのに、パスポートが必要でした。新聞には「中共」「北鮮」「ベトコン」（＝ベストコンディションではありません）という文字が並んでいます。大卒初任給は男子約一万六千円、女子約一万四千円。十七型カラーテレビ四十二万円、銭湯は十六円です。詩誌『蜘蛛』は、輕印刷がほとんどだった時代に、ぜいたくともいえる活字印刷でした。

今回会場には『蜘蛛』全冊も展示されます。ご清鑑くださる皆様が、直接お手にとられることは、難しいかもしれませんが、いったい一冊の価格がいくらであったか、講演のあとの質問でお聞きになるのもいいかも知れません。多くの方々のご来場をお待ちします。

詩誌「蜘蛛」の仲間たち

詩誌『蜘蛛』は1960（昭和35）年12月20日付けで創刊号を発行した。編集グループとして結集したのは伊勢田史郎、君本昌久、中村隆、安水稔和の4名、いずれも当時30代前半で神戸在住の新進気鋭の詩人たちだった。

それから既に半世紀が過ぎ、その頃20歳前後だった若者も古稀を迎えているのだが、おそらく彼らの多くも1960年を一つの節目の年として記憶していることだろう。

いまも〈60年安保〉と略称で呼ばれるように、この年は1月中旬に当時の岸首相らの新日米安全保障条約調印全権団が米国への出発に際し、それを阻止しようとする全学連主流派の700人余が羽田空港に座り込み、警官と衝突することから始まり、5月中旬には自民党がこの法案を強行採決によって可決し、学生たちが首相官邸に突入するなどして、法案の自然成立に至る6月23日まで、デモは東京のみならず全国各地に広がり、反対運動はそれまでにない市民運動的な盛り上がりをみせたが、警察の介入で揉み合うなかで、県立神戸高等学校出身の東大生、樺美智子が犠牲になった。

また、10月には当時の社会党委員長の浅沼稲次郎が立会演説中に右翼の少年に刺殺されるなど、この年は実に多事多難の1年だった。

さて本題に戻ると、詩誌「蜘蛛」創刊の企画はこの安保闘争の真っ最中の6月初旬から始まっていた。君本昌久の編集日録の冒頭には「6月2日　夜おそく、三宮で中村隆、伊勢田史郎と出会った。こんな出会いは過去において一度もなかったことだけに、二人の微笑には印象的なものがあった。あたかも安保のアラシが吹きまいているときでもあったからか、詩人の共通の広場をもとうといった話しが沸騰していた。」とある。

その後神戸周辺の同人誌関係者とも会合を重ね、誌名を「蜘蛛」と命名、9月中旬に創刊号の原稿依頼を開始した。更に編集日録の〈主張〉の部分を引くと「日本の現実は5・19（自民党が安保法案を強行採決した日）を転機として市民の胎動が起こっており……この時代状況をいかに受け止め、記録し、定着させていくべきかを詩人の課題としたい。」とある。編集グループとしては、どうしてもこの記念すべき1960年内に創刊号を発行したかったのだろう。

創刊号の執筆者は編集グループのほか神戸周辺の詩人では、岡田兆功、西本昭太郎、一条寺鉄男（直原弘道）、多田智満子、丸本明子、和田英子ら編集者とほぼ同世代からかなり年長の山村順、亜騎保、足立巻一、内田豊清、杉山平一をはじめ、神戸大学教授の仏文学者小島輝正、独文学の小川正巳らが詩やエッセイを寄せている。また当時既に全国的に知名度の高い吉野弘、山本太郎、中江俊夫、藤富保男らが詩を寄稿、ルネ・シャールの詩抄（水田喜一郎訳）やディラン・トマスの自伝の連載（松浦直巳訳）など盛り沢山の内容で、当時の月刊商業詩誌「詩学」にも質量ともに勝るとも劣らない出来映えだった。

2号は特集のかたちで、まず神戸周辺における戦後15年間の詩作活動を振り返る編集グループの座談会と君本による「戦後神戸詩史ノート」と中村の「戦後神戸詩集展望」のエッセイを掲載し、主要詩誌「尖の鳥」の小林武雄、「MENU」の広田善緒、「IOM」の向井孝、「再現」の喜志邦三ら発行者が創刊当時の事情をエッセイにまとめている。

つづいて3号では、戦前の詩史を特集。年齢順に最高齢の明治31年生の山村順から喜志邦三、福原清、竹中郁、小林武雄、足立巻一、杉山平一をテープレコーダー持参で訪ね、詩作活動を始めた頃からの話を訊いて文章化した。

紙幅の都合でこれ以上は書けないが、まだ30代前半の編集グループ4人はそれぞれの職業に従事しながらも、よくこれ程まで精力的に雑誌作りに傾注できたものだと改めて感心した。

詩誌「蜘蛛」は1965年6月、8号をもって休刊のかたちで企画から5年で幕引きとなったが、休刊後も「100年の詩集―兵庫・神戸・詩人の歩み」をグループで編集するなど地域の詩作活動を主導した。

今回はその活動を関連出版物や写真パネルを展示して、当時を振り返ることとする。

（文中敬称略）